



全国から参加した生徒らと記念写真



小出侑佳さんの口頭発表

REPORT

Meijo Global Festa 2016 開催

文理融合型総合大学の附属校の
メリットを最大限生かし
本学教員がファシリテーターに



あいさつをする
小松審議員

文部科学省からSGH(スーパーグローバルハイスクール)の指定を受けている附属高校は16年11月19日、ナゴヤドーム前キャンパスで、「Meijo Global Festa(名城グローバルフェスタ)2016」を開催しました。本学教員がファシリテーター(助言・講評役)などを務め、文理融合型総合大学の附属校のメリットを最大限生かしました。

東海地区を中心に全国からSGH指定校など22校、約180人の生徒・教員が参加。名城大学が協力しました。開会式では、主催者を代表し、附属高校の岩崎政次校長が「それぞれの学校でそれぞれの課題設定を行っています。今日の交流によって新たな発見をしてみたいと願っています」とフェスタの意義を交えてあいさつしました。引き続き、本学の吉久光一学長と来賓の小松親次郎文部科学審議員があいさつを行いました。

フェスタでは「中部地域とグローバル」というテーマで議論や口頭発表、ポスターセッション等が行われました。分科会A「グローバル化時代の働き方―対立・戦争を越えて協力・共生へ」、分科会B「国民国家とは何か」、分科会C「異文化の見方：文化相対主義を考える」、分科会D「グローバル化」とは？―自分が考える「グローバル化」―が設けられ、それぞれの分科会では、本学から経済学部の渋井康弘教授、経営学部の村松恵子教授、外国語学部の津村文彦教授、都市情報学部の亀井栄治教授がファシリテーターとして問題提起や助言をしました。

4分科会の口頭発表のうち、附属高校生は4つを受け持ちました。分科会Aでは、小出侑佳さん(国際クラス3年)が「Analyzing Needs BOP Business(BOPビジネス※のニーズ分析)」のテーマで、英語で発表しました。小出さんは



分科会Bでファシリテーターを務める村松教授(奥)



口頭発表する(右から)
矢澤さん、大崎さん、吉戸さん



にぎわうポスターセッション



全体講評をする
クマラ学部長



閉会式で全体講評を聞く附属高校生ら



閉会宣言をする小出有稀さん

「もうからないと言われているBOPビジネスでも、セグメント(分野)を設定し、それぞれのニーズを分析すれば、そもそも対象人口が多いので少しでも収益が上がるようになると思えます」と結論づけました。

続いて、大崎祐実さん、矢澤優香さん、吉戸知帆さん(いずれも国際クラス3年)が「A Solution of Problems over Fair Trade - For the Real "Fair" Trade - (フェアトレードをめぐる諸問題の解決 - 真の意味で公正な交易のために -)」と題し、学習成果をリレー形式で発表しました。

この後、浜井、村松、津村の3教授に都市情報学部の鈴木淳生准教授を加えた4人が、それぞれの分科会について講評しました。村松教授は講評に加えて「グローバル化時代を生き抜くには、英語力と同時に日本語力も必要です。日本のことを知らなければなりません。無駄な知識は一つもありません。私が考えるグローバルリーダーとは、多様性を受容する力をもつ人です。違いを違いとして受け入れなければ、グローバル化社会で共存はできません」と基本理念を示して総括しました。

※年間所得が購買力平価(PPP)ベースで3,000ドル以下の低所得層はBOP(Base of the Economic Pyramid)層と呼ばれ、開発途上国を中心に、世界人口の約7割を占めるとも言われています。BOPビジネスとは、途上国のBOP層にとって有益な製品・サービスを提供することで、当該国の生活水準の向上に貢献しつつ、企業の実業も達する持続的なビジネスです。(JETROウェブサイトより)

附属高校

ポスターセッションは20題のうち8題が附属高校生のものでした。それぞれのポスターの前には人だかりができ、発表者の生徒たちは日ごろ磨いてきたプレゼンテーション能力を披露しました。齋藤歩美さん(国際クラス3年)は「二宮市の織物業の現状と課題に対する提案」をまとめ、英文で書いたポスターの脇に立つて解説しました。

閉会式では、外国語学部のアーナンダ・クマラ学部長が「本日皆さんは異文化に触れました。私のような外国人ではなく、自分の学校と違う文化で学んでいる若者との出会いです。日本は世界人口の6割が住むアジア地域にあります。アジアのハングリー精神のある人たちと一緒に仕事をするのは生やさしいことではありませんが、英語をツールとして、相手の文化的違いや価値観を認めながらコミュニケーションしてください」と全体講評をしました。

この後、生徒実行委員委員長の小出有稀(ゆうき)さん(国際クラス2年)が閉会宣言を行い、フェスタは盛況のうちに閉幕しました。

SGHの初年度(2014年度)指定校の文部科学省による中間評価で、附属高校は「優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」という最高の評価を受けました。最高の評価を受けた指定校は全国で56校のうち4校だけです。4校の取組は、12月26日に東京のお茶の水女子大学講堂で開催されたスーパーグローバルハイスクール第1回全国フォーラムで紹介されました。

また、翌27日に行われたSGH連絡会では、評価の高かった8校が、各校が提出した題目に基づいて分科会を行いました。

附属高校は「生徒の資質変容の定量的評価」という題目で行い、50人ほどの参加者がグループに分かれて、各校の実態に合った生徒の評価項目作りを行いました。